

四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書

2003年3月

四條畷市教育委員会

四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書

2003年3月

四條畷市教育委員会

例　　言

1. 本書は、四條畷市教育委員会が平成 14 年度国宝重要文化財等保存整備費補助金事業の交付を受けて担当実施した市内遺跡発掘調査等の概要報告書である。
2. 忍岡古墳は平成 14 年 8 月 26 日に着手し 12 月 20 日までの間現地調査を行った。奈良井遺跡は平成 14 年 10 月 7 日に現地調査を実施。正法寺跡（清滝古墳群）は平成 15 年 1 月 14 日に着手し 1 月 20 日まで現地調査を行い平成 15 年 3 月 31 日に整理作業を終了した。
3. 調査は、四條畷市教育委員会社会教育部生涯学習課主任野島稔、技術職員村上始が担当した。
4. 現地調査の実施にあたっては、前川利文、上田登造、忍陵神社、忍岡古墳覆屋再建委員会、山地建設株式会社、中山建築設計事務所から数々の配慮を得た。記して感謝する次第である。
5. 発掘調査の進行については、大阪府教育委員会文化財保護課、関西外国语大学瀬川芳則、櫻井敬夫、寝屋川市教育委員会 塩山則之・濱田延充、大東市立歴史民俗資料館 黒田淳一、京都大学 坂口英毅、畠古文化研究保存会の各氏から指導・助言を得た。記して感謝の意を表したい。
6. 出土遺物の整理などについては、野島 稔、村上 始、佐野喜美があたった。
7. 本書の執筆は野島 稔が行った。

本　文　目　次

例　　言

第 1 章	遺跡の位置と歴史的環境	1
第 2 章	調査にいたる経過	5
第 3 章	調査の成果	7
第 4 章	ま　と　め	23
	報告書抄録	27
付 章	忍岡古墳 四條畷市文化財シリーズ 2	28
図 版		

図版目次

- 図版1 忍岡古墳覆屋解体前・覆屋解体後全景
図版2 忍岡古墳石室全景・研究者に公開
図版3 忍岡古墳精査・石室内部全景
図版4 忍岡古墳石室全景・石室板石と封土粘土
図版5 忍岡古墳石室南側板石と河原石検出状況
図版6 忍岡古墳石室覆屋完成・石室内掃除状況
図版7 忍岡古墳トレンチ設定状況
図版8 奈良井遺跡調査前全景
図版9 奈良井遺跡トレンチ設定状況・調査スナップ
図版10 正法寺跡(清滝古墳群)調査前全景・機械掘削状況
図版11 正法寺跡(清滝古墳群)遺構検出状況
図版12 正法寺跡(清滝古墳群)河川1・河川2遺構完掘状況
図版13 正法寺跡(清滝古墳群)落ち込み1・溝状遺構完掘状況
図版14 正法寺跡(清滝古墳群)河川1・河川2内出土遺物

挿入目次

第1図	忍岡古墳・奈良井遺跡・正法寺跡(清滝古墳群)周辺地形遺跡分布図	2
第2図	忍岡古墳・奈良井遺跡・正法寺跡(清滝古墳群)調査区位置図	8
第3図	忍岡古墳 断面実測図	10~11
第4図	奈良井遺跡建物予定地及びトレンチ位置図	13
第5図	正法寺跡(清滝古墳群)断面実測図	15~16
第6図	正法寺跡(清滝古墳群)調査区遺構平面実測図	19~20
表1	紡錘車元素分析表	25
表2	鍬形石元素分析表	25
表3	石鉤元素分析表	26
表4	竪穴式石室板材元素分析表	26

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

四條畷市は大阪府の北東部に位置する。四條畷市正法寺跡は大阪府四條畷市清瀧に所在し、飯盛山系の西側斜面から派生する海拔30～35mの清瀧丘陵上にある。南北に谷地形をなし、飯盛山系から西に向って、讚良川・岡部川・清瀧川・権現川が流れている。

生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は京都府八幡丘陵から南は四條畷市南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵、段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川、寝屋川市寝屋川、四條畷市讚良川・清瀧川という中小河川によって開かれている。この枚方台地は、原始・古代における幾多の遺跡の存在が知られている。

旧石器時代

四條畷市周辺の旧石器時代の遺跡として、更良岡山遺跡の範疇である讚良川床遺跡では、ハンドアックス・ナイフ形石器・細石器・削器・彫器などが出土している。また、JR忍ヶ丘駅の南側にある南山下遺跡で長さ11cmの完全な有舌尖頭器が出土し、四條畷市忍岡古墳付近でナイフ形石器が採集されている。これらは枚方台地における旧石器研究上きわめて重要な位置をしめている。

縄文時代

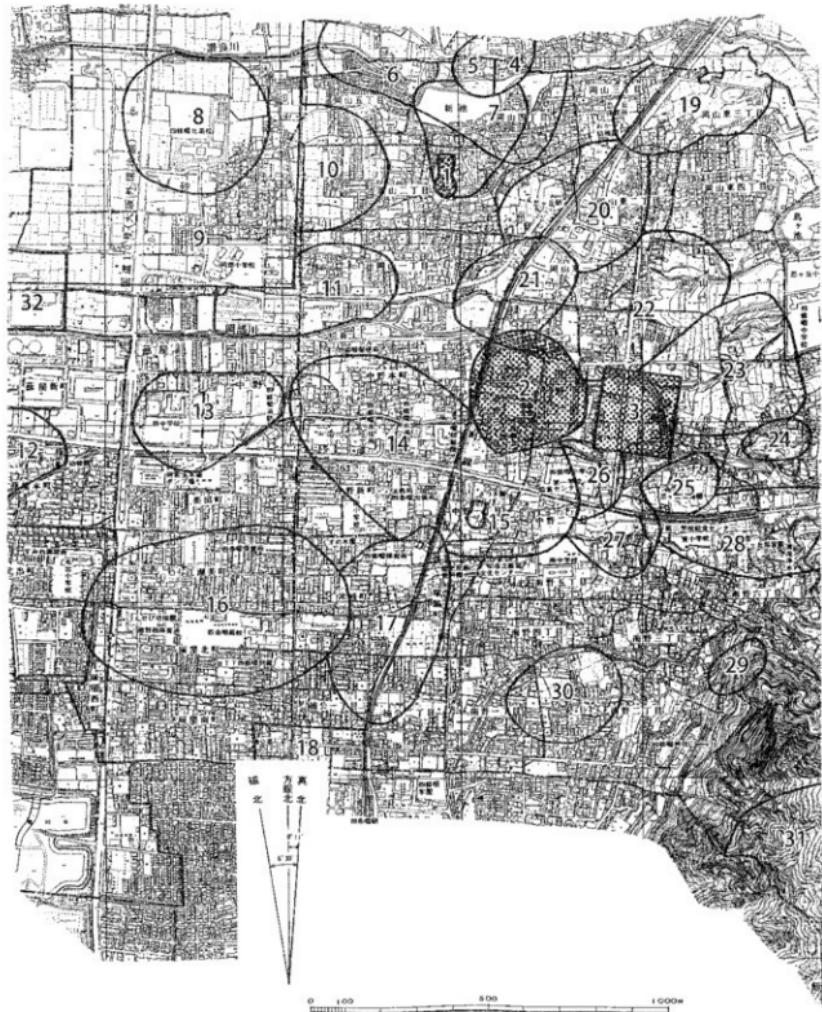
四條畷市田原遺跡や、交野市神宮寺遺跡、枚方市穂谷遺跡で米粒文・山形文を施した縄文時代早期の押型文土器などが出上している。これらは近畿地方における最古の土器である。

縄文時代中期は、四條畷市南山下遺跡・砂遺跡、寝屋川市讚良川遺跡がある。讚良川遺跡では大量の船元式土器が出土した。

後期・晚期においては、四條畷市更良岡山遺跡で土偶・大型彫刻石棒・ヒスイ製石斧・土製勾玉などの祭祀具をはじめ高杯形土器・深鉢・注口土器などの土器類と多量の石器類が出土した。他に四條畷小学校内遺跡や大上遺跡・清瀧古墳群で土器類や石器が出土している。

弥生時代

四條畷市雁屋遺跡で弥生時代前期の大壺（高さ78cm）が出土している。この大壺は北九州の板付II式といわれているものである。その壺に伴い石庖丁が2点出土した。そのうちの1点は奈良県耳成山の流紋岩製である。この石庖丁と大壺の出土は北河内で最初に稻作が開始されたことを示している。なお、この調査区の50m東で縄文時代晩期末の深鉢が出土している。その他、前期の遺跡は四條畷市田原遺跡がある。



- | | | | | | |
|-----------|------------|------------|-------------|---------------|-----------|
| 1. 志岡古墳 | 7. 更良岡山古墳群 | 13. 稲田遺跡 | 19. 坪井遺跡 | 25. 人上遺跡 | 31. 飯盛山城跡 |
| 2. 奈良井遺跡 | 8. 砂遺跡 | 14. 中野遺跡 | 20. 忍ヶ丘駅前遺跡 | 26. 四條畷小学校内遺跡 | 32. 雁屋北遺跡 |
| 3. 正法寺跡 | 9. 讀良郡条里遺跡 | 15. 離ノ堂占墳 | 21. 南山下遺跡 | 27. 小鶴池北方遺跡 | |
| 4. 讀良川宋遺跡 | 10. 北山遺跡 | 16. 雁屋遺跡 | 22. 岡山南遺跡 | 28. 城遺跡 | |
| 5. 讀良寺跡 | 11. 余良田遺跡 | 17. 南野米崎遺跡 | 23. 清瀬古墳群 | 29. 近世墓地 | |
| 6. 更良岡山遺跡 | 12. 郡屋遺跡 | 18. 楠公遺跡 | 24. 国中神社内遺跡 | 30. 南野遺跡 | |

第1図 忍岡古墳・奈良井遺跡・正法寺跡（清瀬古墳群）周辺地形遺跡分布図

中期における雁屋遺跡は拠点的集落として機能した。雁屋遺跡で多数の方形周溝墓が確認され、コウヤマキ・ヒノキ・カヤなどの木棺が出土した。なかでもコウヤマキ製のものは完

全な姿で出土した。ヒノキの木棺から完全な人骨も出土した。方形周溝墓の溝から墓前祭祀に使われた朱塗りの壺や把手付碗などが出土した。木製品では、双頭渦文が彫刻された蓋付四脚容器などがある。材質はヤマグワで朱彩されていたが、現在は朱の痕跡を確認することはできない。その他、ノグルミ製鳥形木製品は墓で使われた最古のものであった。また大阪府教育委員会の雁屋遺跡発掘調査でも鳥形木製品が出土している。

石製品は大量に出土しているが、特筆すべきものは銅鐸の舌が2本出土していることである。そのうちの1本は徳島県吉野川産の塩基性凝灰岩質点紋片岩製である。銅鐸については、「明治44年に、砂岡山から入れ子になった銅鐸2口が出土した」と伝えられる砂山銅鐸2口があるが、関西大学の所蔵となっている。

その他、分銅形土製品が2点出土している。

後期の雁屋遺跡は日本海側と交流を持つ活発な集落となった。丹後・北陸地方の様式をもつ把手付き鉢（住居跡）や脚付き鉢（円形周溝墓）、出雲の様式をもつ低脚杯（包含層）がそれを示している。

大阪府内でもこのように活発な交流をした遺跡は見当たらず、拠点的集落として存在した重要な遺跡である。

古墳時代

古墳時代前期に築造された全長約87mの前方後円墳「忍岡古墳」がある。この古墳の竪穴式石室は覆屋で保存され見学できるが、覆屋が老朽化し建て直しされ平成14年12月に完成した。この古墳築造に関わった集落は確認されていないが今後の調査で発見できる可能性がある。

古墳時代中期になると四條畷市を中心にして馬の飼育が始まった。馬は朝鮮半島から運ばれ、渡来系の人々によって牧場が開かれた。

古墳時代の四條畷市は飯盛山系が南北に走り、山麓の西方2kmほどで河内湖となる。生駒山系から、讚良川・岡部川・清滝川・権現川が河内湖に注ぎ、この川が自然の柵となり牧場に適した環境であった。

鎌田遺跡では楽器のスリザサラや祭具を載せる台が、奈良井遺跡では犠牲馬の首をはじめ儀式で使われた人形・馬形の土製品やミニチュア土器が出土している。最近では大阪府教育委員会の調査による都屋北遺跡で大量の製塙土器、馬具の鑑、準構造船をリサイクルした井戸枠、埋葬馬が完全な姿で出土し、注目されている。四條畷小学校内遺跡・奈良井遺跡・中野遺跡などで初期須恵器をはじめ韓式土器や韓式系土器が数多く出土し、渡来系の人々の存

在を示している。

古墳については、墓ノ堂古墳をはじめ、馬飼の人々が墓域とした清滝古墳群や大上古墳群など次々と築造された。大上古墳群からは横穴式石室が発見されたが、鎌倉時代に盗掘され遺物のほとんどは失われていたが金銅装中空耳環が片方出土した。その他の古墳で多数の副葬品が出土している。埴輪の出土については、ほとんどが円筒埴輪である。

形象埴輪のほとんどは集落遺跡から出土したものである。忍ヶ丘駅前遺跡で人物埴輪・犬形埴輪（オスの子犬）・水鳥形埴輪、南山下遺跡で馬形埴輪、岡山南遺跡で家形埴輪が出土している。なお、家形埴輪に伴って左足用の日本最古の木製下駄が出土している。古墳からの出土した形象埴輪は、忍ヶ丘駅前2号墳で琴を弾く男性埴輪などがある。

奈良時代

古墳時代に飯盛山系山麓に築かれた古墳群が、奈良時代の正法寺建立の際に整地されたことにより破壊されており、ほとんどの主体部が削平されている。

正法寺跡周辺では近年奈良時代の遺跡が発見されている。木間池北方遺跡の河川から円面鏡や土器と共に土馬が7体出土した。南野遺跡では「大」の字を墨書した土器が出土した。

城遺跡では通産省との合同地震調査が行われ、生駒断層の跡が発見された。この断層の研究の結果、断層の上の層から奈良時代の須恵器杯が出土し、地震は奈良時代以前におこったと判断できた。その後、炭素年代法の分析から地震は縄文時代から弥生時代ごろであったことが判明した。近年、考古学と地質学が共同で研究する地震考古学が注目され地震予知の研究がなされている。

平安時代

平安時代には井戸が多く発見されるようになるが、中野遺跡（平成3年調査）では「如月廿日」の墨書曲物が出土し、岡山南遺跡では「高田宅」「福万」などの墨書土器が井戸から出土している。

また、上清滝遺跡では「塔の坊」の小字名が残る一番高い場所に方形基壇が確認され、その上に二間×二間の祠堂が建てられていた。この基壇の近くの斜面の溝から仏具などが発見された。木製聖観音立像二体・金箔製光背・木簡などの仏具、茶道具の茶釜・茶臼・中国陶磁器・天目茶碗、下駄、将棋の駒、そして門前で飲み食いしたであろう食器類の瓦器碗・土師器皿・箸が多量に発見された。

また、この溝で木簡も出土している。寿永三年（1184）の年号が書かれていた題簽軸や「はせのたね」と稻の品種をかいた荷札が見つかっている。

第2章 調査にいたる経過

忍岡古墳

忍岡古墳は四條畷市岡山二丁目、JR忍ヶ丘駅の西方約300mの丘陵上に位置している。

この古墳の発見は、昭和9年9月の室戸台風の際に忍陵神社が倒壊し、翌年の再建工事中に石室が露出したことから始まる。そこで京都大学が発掘調査にあたり古墳時代前期の古墳であることが判明した。副葬品については、すでに盗掘されていたものの碧玉製の紡錘車・鍬形石・石鉗、青の部材である小札・刀子・鉄斧などの石製品・鉄製品が出土した。その時に石室内から埴輪片も採集されている。

京都大学による発掘調査後、地元の人々の努力によって石室を保護する覆屋が建てられ、大切に保存されていたが、老朽化と平成7年の神戸大震災によって覆屋が西側に傾き、忍陵神社の社殿側に倒壊のおそれがあり、石室覆屋を再建することになった。

平成14年5月22日に宗教法人忍陵神社から大阪府史跡忍岡古墳の現状変更手続きが四條畷市教育委員会に提出された。

古墳石室を67年ぶりに掃除を行い、石室内外の写真撮影と覆屋に伴う基礎部分の立ち合い調査をした。また、墳丘部の身障者用の道路拡張に伴う発掘調査を実施した。

奈良井遺跡

奈良井遺跡では昭和54年に市民総合センターの建設工事に伴う調査によって、一辺40mの方形と想定される「馬のまつり場」全体の1/3が確認された。

「まつり場」のマウンドをとりまく溝からは大量の土器類とともに、板の上に乗せて埋葬された馬や、犠牲馬の頭部をはじめ7体以上の馬骨が確認された。大阪府立大学名誉教授の望月宏氏の鑑定によると犠牲馬は歯の状態から14歳以上と推定されるオスであった。また、儀式で使われた人形・馬形の土製品やミニチュア土器が出土している。このような状況から馬飼いが牧場の繁栄を願った「馬のまつり場」であったと考えている。古墳時代中期から後期にかけて機能した。

今回の調査区は平成14年6月24日付けで前川利文氏から、四條畷市教育委員会に四條畷市大字中野403において一戸建住宅建設に伴って、文化財保護法第57条の2第1項の規定により埋蔵文化財発掘の届出が提出された。

開発内容の検討・協議を行い、奈良井遺跡の一辺40mの祭祀遺構が今回の申請地の中央

部分にあたるため、平成 14 年度国庫補助事業として平成 14 年 10 月 7 日に現地発掘調査を行うこととなった。

正法寺跡（清滝古墳群）

正法寺跡は數次にわたって発掘調査され、白鳳時代の素弁八葉蓮華文軒丸瓦を創建瓦とし、三重の塔を東西にもつ薬師寺式伽藍配置の大寺院であったと推定され、白鳳時代から室町時代に至るまで存在したことが判明している。寺域からは正方寺の墨書のある土師器皿が出土している。

今回の調査区は、昭和 53 年～昭和 54 年度に一級河川清滝川分水路改修工事に先立ち調査した地域の東側隣接地にあたる。

清滝川分水路改修予定地から、古墳時代後期の円墳 2 基、大溝 1 基、合わせ口甕棺墓 1 基、奈良時代の落ち込み状遺構、建物跡、鎌倉時代～室町時代の板枠井戸 1 基が確認された。

円墳 2 基のうちの第 2 号墳は東西 23.4 m、南北 23.5 m の規模であった。古墳の墳丘上部は削平されており、わずか 0.35 m が残存するだけであった。したがって、墳丘部埋葬施設は確認できなかった。しかし、周溝内の土坑内から多量の土師器と須恵器が出土した。また、東周溝内においては器台・装飾壺、北周溝内には壺・長頸壺・甕・高杯・鉄製刀子。西周溝内には、杯蓋・短頸壺・碧玉製切子玉・円筒埴輪・馬の歯。南周溝内には、はそう・杯蓋・滑石製紡錘車がそれぞれ出土している。

西周溝内からの馬の歯は一地点からの出土であり、歯の検出本数からみて馬一頭分の頭部にあたる。歯の出土する場所が他の周溝に比べ多少深く約 0.2 m の窪みであった。この頭骨部の埋葬時に土坑状に掘り込んでいたと思われる。

遺跡は古墳群と正法寺跡が複合しており、寺跡の東端部に近い場所に双子塚の小字名が残り、円筒埴輪片も採集されている。

今回の調査は平成 15 年 1 月 9 日付で上田登造氏から、四條畷市教育委員会に四條畷市大字清滝 362-1 において宅地造成に伴って、文化財保護法第 57 条の 2 第 1 項の規定により埋蔵文化財発掘の届出が提出された。

申請地は、正法寺字切岡で正法寺にあたり上記の時代の遺跡が所在する可能性があり、平成 14 年度国庫補助事業として平成 15 年 1 月 14 日から 1 月 20 日まで現地発掘調査を行うこととなった。

第3章 調査の成果

忍岡古墳（第2図～第3図・図版1～図版7）

平成14年8月23日から忍岡古墳の覆屋解体に伴い、8月26日に四條畷市教育委員会が石室内外の掃除作業を行った。作業終了後、北河内地域の考古学研究者等で石室内部の検証を行い、石室の細部にわたり写真撮影を行った。

石室の構造は安山岩質の板石を小口積みしていき、上部を同質の板石を並架するもので、多くの竪穴式石室に見られる構造である。

昭和10年の京都大学の発掘調査の結果は、梅原末治博士によって「日本古文化研究報告第4・近畿地方古墳墓の調査2・第二河内四條畷村忍岡古墳」に報告されている。

また、昭和49年に忍岡古墳の竪穴式石室の実測図を作成して四條畷市文化財シリーズ2「忍岡古墳」四條畷市教育委員会の報告をしている。（付章に添付）

梅原末治博士の前掲の報告書には、石室内部の側壁の石に朱の付着が認められ、粘土床の凹みには、朱の薄層があったと報告されている。しかし、昭和49年の「忍岡古墳」の報告には覆屋の中での実測作業で暗いこともあるって、朱は現在では認められないと報告されている。

しかし、今回の調査で覆屋が解体され石室内部に入り自然光によって観察した結果、石室南側の東壁及び西壁の一部と北側の北壁及び東壁に赤色顔料がそれぞれ認められた。

平成9年度の四條畷市立歴史民俗資料館の第12回特別展「はにわはともだち」の際奈良県立橿原考古学研究所の今津節生氏に碧玉製錘車・鍬形石・石鉗などの副葬品と板石に塗られた赤色顔料の分析を依頼したところ、表1～表4の分析結果がでた。

分析結果によると、副葬品には水銀朱が、竪穴式石室の石材には第二酸化鉄が塗布され、使いわけられていたことが判明した。

次に、大阪府指定史跡忍岡古墳の現状変更等の申請が出されていた身体障害者用の参道拡幅部分については、忍岡古墳後円部の東北部に長さ14.4mの第1トレーニングを設定した。トレーニングの南側断面観察を行った結果、基本層序は以下の通りであった。

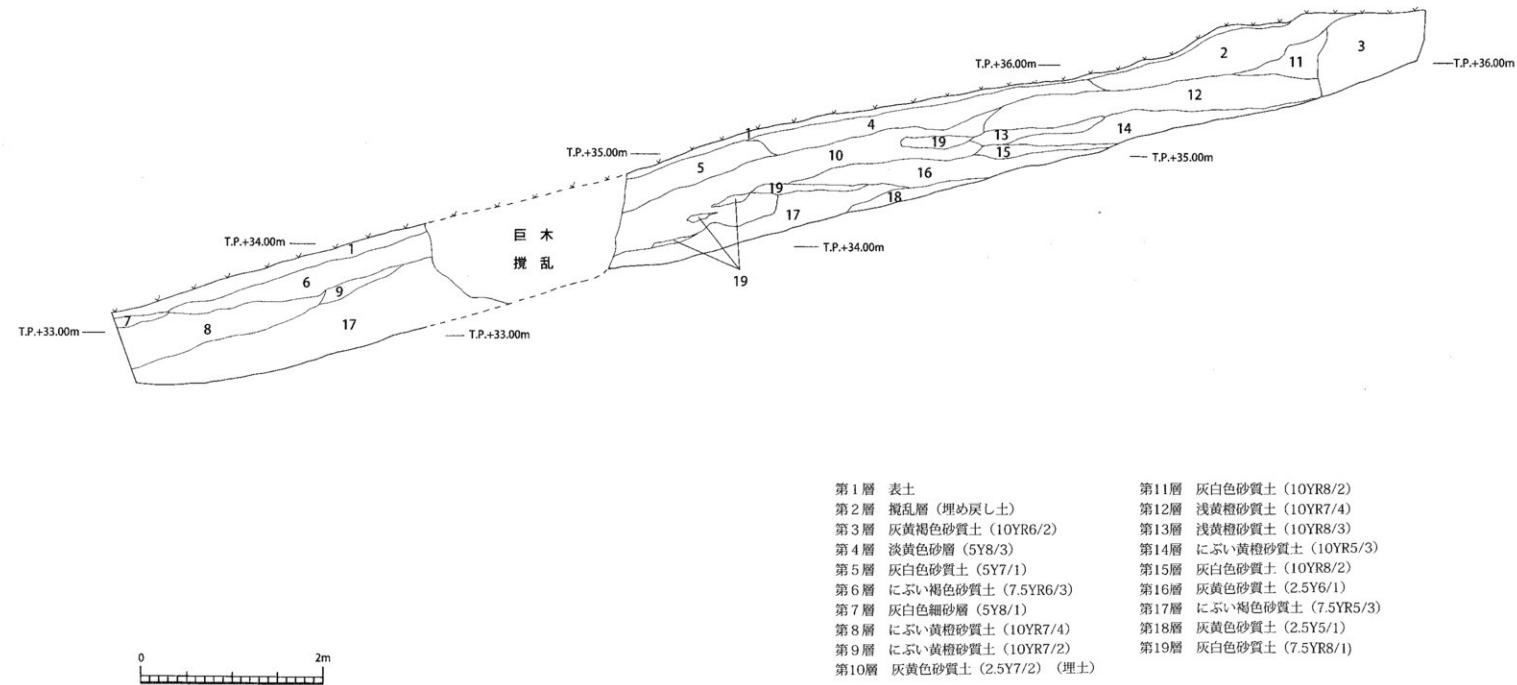
第1層 表土で厚さは、約10cmである。墳丘部の一番高い場所でT・P + 36.775mである。

第2層 撹乱層（埋め戻し土）墳頂部側で約2.9mの範囲に厚さは、約45cmである。



第2図 忍岡古墳・奈良井遺跡・正法寺跡（清滝古墳群）調査区位置図

- 第3層 灰黄褐色砂質土（10YR6/2）墳頂部の一部に堆積、厚さ約80cmである。
- 第4層 淡黄色砂層（5Y8/3）第1トレンチの中央部の一部、長さ3.9mに堆積、厚さ約25cmである。
- 第5層 灰白色砂質土（5Y7/1）第4層の左下方、長さ約1.7mに堆積、厚さ約35cmである。第5層の灰白色砂質土（5Y7/1）と第6層のにぶい褐色砂質土（7.5YR6/3）との接点は巨木の根によって攪乱されているため不明である。
- 第6層 にぶい褐色砂質土（7.5YR6/3）第1トレンチの東端に厚さ約10～25cmである。
- 第7層 灰白色細砂層（5Y8/1）古墳の基底部の東端に堆積、厚さ約10cmである。
- 第8層 にぶい黄橙砂質土（10YR7/4）第1トレンチの古墳基底部側の一部に長さ2.2m 厚さ約10～40cmである。
- 第9層 にぶい黄橙砂質土（10YR7/2）厚さ約15cmである。
- 第10層 灰黄色砂質土（2.5Y7/2）（埋土）第1トレンチのほぼ中央部に厚さ約30～50cm である。この土層内にブロック状に灰白色砂質土7.5YR8/1厚さ10cmが5カ所認められる。
- 第11層 灰白色砂質土（10YR8/2）墳頂部側の一部に堆積、厚さ約45cmである。
- 第12層 浅黄橙砂質土（10YR7/4）墳頂部側の長さ3.7mの範囲に堆積、厚さ約20～40cmである。
- 第13層 浅黄橙砂質土（10YR8/3）厚さ約5～25cmである。
- 第14層 にぶい黄橙砂質土（10YR5/3）墳頂部側の最下層の一部に厚さ約30cmである。
- 第15層 灰白色砂質土（10YR8/2）厚さ約10～15cmである。
- 第16層 灰黄色砂質土（2.5Y6/1）最下層の一部に厚さ約30cmである。
- 第17層 にぶい褐色砂質土（7.5YR5/3）第1トレンチの中央部の最下層で厚さ約20～40cmである。
- 第18層 灰黄色砂質土（2.5Y5/1）第1トレンチ中央部の一部の最下層で厚さ約15cmである。
- 以上の断面観察の結果、忍岡古墳の前方後円墳の後円部にトレンチを設定したが、古墳墳丘部の葺石及び埴輪列等を確認することができなかった。しかし、昭和10年の調査で石室の崩壊した部分から埴輪が出土したと報告され、京都大学総合博物館に保管されている。
- また、断面の第17層にぶい褐色砂質土（7.5YR5/3）と第18層灰黄色砂質土（2.5Y5/1）



第3図 忍岡古墳断面実測図

の堆積土層は安定した土であるのに対し、その上層の土は古墳築造以降に人為的に触られていると思われる。

奈良井遺跡（第2図・第4図・図版8～図版9）

この調査区は、四條畷市中野三丁目地内で奈良井遺跡「馬のまつり場」の中心部にあたる。

昭和54年、四條畷市立市民総合センター建設に伴って発掘調査され、馬に関わる祭祀遺構である方形周溝状遺構を検出した。遺構の規模は、一辺約40m。周溝の規模は、最大肩幅約5m・深さ約1～1.5mのU字状を呈していた。周溝内から古墳時代中期から後期にかけての須恵器大甕・高杯・杯蓋・杯身・はそう、土師器甕・高杯及び滑石製白玉・石製丸玉、土製模造品の人形土製品・馬物形土製品・ミニチュア土器、木製のブラシヒムチと共に、板の上に乗せて丁寧に埋葬されていた蒙古系の小型馬や、首を切り取られた犠牲馬の頭骨部が土坑内から出土した。

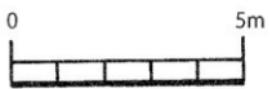
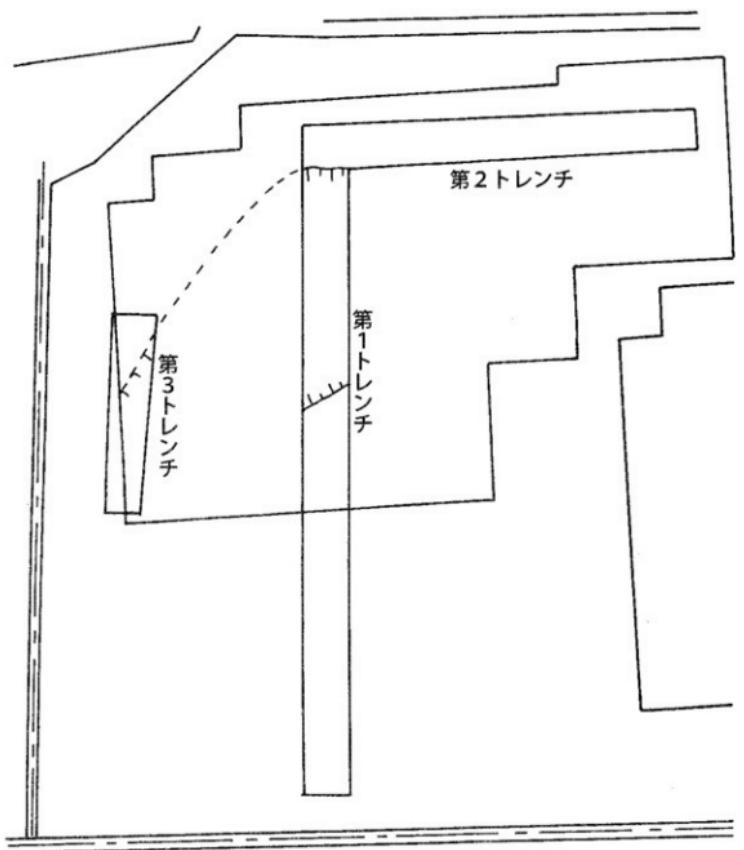
また、方形状と考えられるマウンド上で土坑が2基検出され、土師器甕と土師器高杯がそれぞれ出土した。

今回の調査区は市民総合センターのすぐ東側の巾9.9mの府道枚方富田林泉佐野線に接する場所であり、方形周溝状遺構の中心部にあたるため、個人住宅の建て替えに伴い、申請部分の面積133m²内に3本のトレンチ調査を設定した。

最初にバックホーで、申請地の中央部に東から西方向に巾1m・長さ14.3mの第1トレンチを設定した。その結果、表土層の約10cm掘り下げるとトレンチ東端で灰白色砂層と、西側で灰白色シルト層を確認した。この面を精査すると、灰白色砂層は巾5mで南北方向に溝を検出した。検出面の高さは、T・P + 23.56mを測る。灰白色の砂層を人力で約24cm掘り下げると、灰白色シルト層を確認した。灰白色砂層内からは全く土器等は出土しなかった。西側で確認した灰白色シルト層は、地山層であることを確認した。

第2トレンチは、第1トレンチの東端からL形に南方向に巾1m・長さ7.5mまで設定した。その結果、第1トレンチの西側で確認した地山層の灰白色シルト層が一面に確認した。しかし、第1トレンチで確認した巾5mの溝が第2トレンチでは確認できなかった。

第3トレンチは予定建物の北西隅に東西方向に巾1m・長さ4.3mを設定した。この第3トレンチのコーナー部分で溝の東側肩部を確認したが、第1トレンチ同様に灰白色砂層の深



第4図 奈良井遺跡建物予定地及びトレンチ位置図

さ30cmを掘り下がったが、遺物は全く出土しなかった。

今回の調査区は、上記にも述べた古墳時代中期から後期にかけての方形周溝状の祭祀遺跡のステージ部分であつたが後世の段階で削平されたと思われる。

正法寺跡（清滝古墳群）（第2図・第5図～第6図・図版10～図版14図）

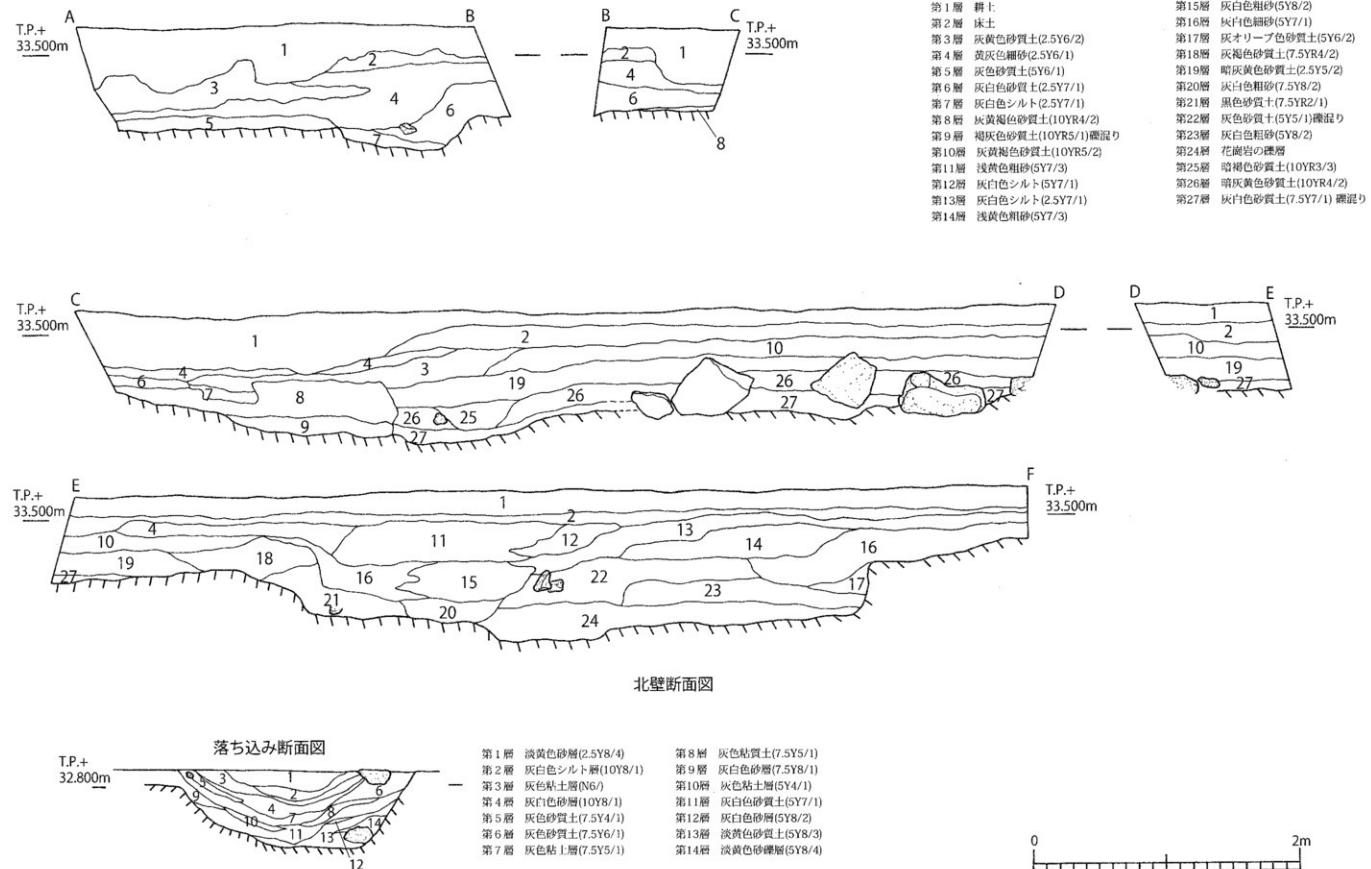
この調査区は、四條畷市大字清滝地内で正法寺跡の北東部に位置する。正法寺字切図で見ると、字正法寺の範囲は、南は清滝川まで字正法寺で、清滝川の南側は字大上になっている。北は別宮川まで字正法寺で、別宮川の北側は別宮になっている。また、東は清滝川分水路の中央部で北が字正法寺、東が馬場となっている。西側は、市管理道路西側の中野と清滝の境界まで字正法寺にあたり、字正法寺の範囲は東西275m・南北250mで字正法寺の水田は63筆にあたる。

今回の調査区は昭和52年度、大阪府枚方土木事務所による一級河川清滝川分水路改修工事を行った後の残地で、字正法寺切図でも判るように北東部分でもっとも大きい水田地であった。この改修工事については正法寺の遺跡範囲外であつたため、試掘調査等もなされていなかった。しかし、昭和52年～昭和53年にかけて清滝川分水路が南側に延長されるのに伴って発掘調査され、正法寺跡から初めて古墳が発見された。調査の結果、古墳時代中期から後期の円墳2基を検出した。しかし、古墳の埋葬施設である墳丘部は正法寺造営時に削平されていた。

この古墳の発見によって、正法寺跡の一部を含む東側に清滝古墳群として文化財分布図に周知した。

四條畷市中野に所在する浄土宗正法寺の本堂前に石棺を転用した清め水の水槽が置かれている。また、清滝に所在する式内社国中神社の石段登り口に石棺蓋が立てられて保存されている。この石棺の身と蓋は双子塚から出土したとい伝えられている。双子塚は正法寺跡の寺域の北東部に隣接する場所である。しかし、上記に述べたように昭和52年の清滝川分水路工事では双子塚に接する部分の調査がなされておらず遺構の有無については不明である。

以上の結果に基づいて開発内容を検討し申請者と協議したところ、宅地造成に伴い切土を行なう箇所について遺跡を破壊するため、発掘調査を実施することになった。調査面積は120m²、調査期間は平成15年1月14日から1月20日まで実施した。（第6図）



第5図 正法寺跡（清滝古墳群）断面実測図

第1節 基本層序

今回の調査区で調査を行った堆積土層は次のとおりである。

- 第1層 耕土 厚さは、約 10～40cm である。
- 第2層 床土 厚さは、約 15cm である。
- 第3層 灰黄色砂質土 (2.5Y6/2) 厚さは、約 20cm である。
- 第4層 黄灰色細砂 (2.5Y6/1) 厚さは、約 10～50cm である。
- 第5層 灰色砂質土 (5Y6/1) 厚さは、約 10cm である。
- 第6層 灰白色砂質土 (2.5Y7/1) 厚さは、約 8～25cm である。
- 第7層 灰白色シルト (2.5Y7/1) 厚さは、約 10cm である。
- 第8層 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 厚さは、約 8～25cm である。
- 第9層 褐灰色砂質土 (10YR5/1) 磯混り 厚さは、約 15cm である。
- 第10層 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) 厚さは、約 15cm である。
- 第11層 浅黄色粗砂 (5Y7/3) 厚さは、約 5～20cm である。
- 第12層 灰白色シルト (5Y7/1) 厚さは、約 20cm である。
- 第13層 灰白色シルト (2.5Y7/1) 厚さは、約 10～20cm である。
- 第14層 浅黄色粗砂 (5Y7/3) 厚さは、約 20cm である。
- 第15層 灰白色粗砂 (5Y8/2) 厚さは、約 30cm である。
- 第16層 灰白色細砂 (5Y7/1) 厚さは、約 5～20cm である。
- 第17層 灰オリーブ色砂質土 (5Y6/2) 厚さは、約 20cm である。
- 第18層 灰褐色砂質土 (7.5YR4/2) 厚さは、約 5～20cm である。
- 第19層 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2) 厚さは、約 10～20cm である。
- 第20層 灰白色粗砂 (7.5Y8/2) 厚さは、約 18cm である。
- 第21層 黒色砂質土 (7.5YR2/1) 厚さは、約 20cm である。
- 第22層 灰色砂質土 (5Y5/1) 磯混り 厚さは、約 15～35cm である。
- 第23層 灰白色粗砂 (5Y8/2) 厚さは、約 15cm である。
- 第24層 花崗岩の礫層 厚さは、約 5～20cm である。
- 第25層 暗褐色砂質土 (10YR3/3) 幅約 62cm、深さ約 20cm の溝である。
- 第26層 暗灰黄色砂質土 (10YR4/2) 厚さ約 15cm である。
- 第27層 灰白色砂質土 (7.5Y7/1) 磯混り 厚さは、約 10～20cm である。

第2節 遺構・遺物

調査区西側の北側断面の観察結果で、第1層耕土から第4層黄灰色細砂(2.5Y6/1)の堆積土層が攪乱されていることは、清滝川分水路改修工事に伴う擁壁工事で復旧したためである。

調査区内で検出した遺構は、石列遺構・落ち込み状遺構・河川1・河川2である。

◎ 石列遺構（第6図・図版11）

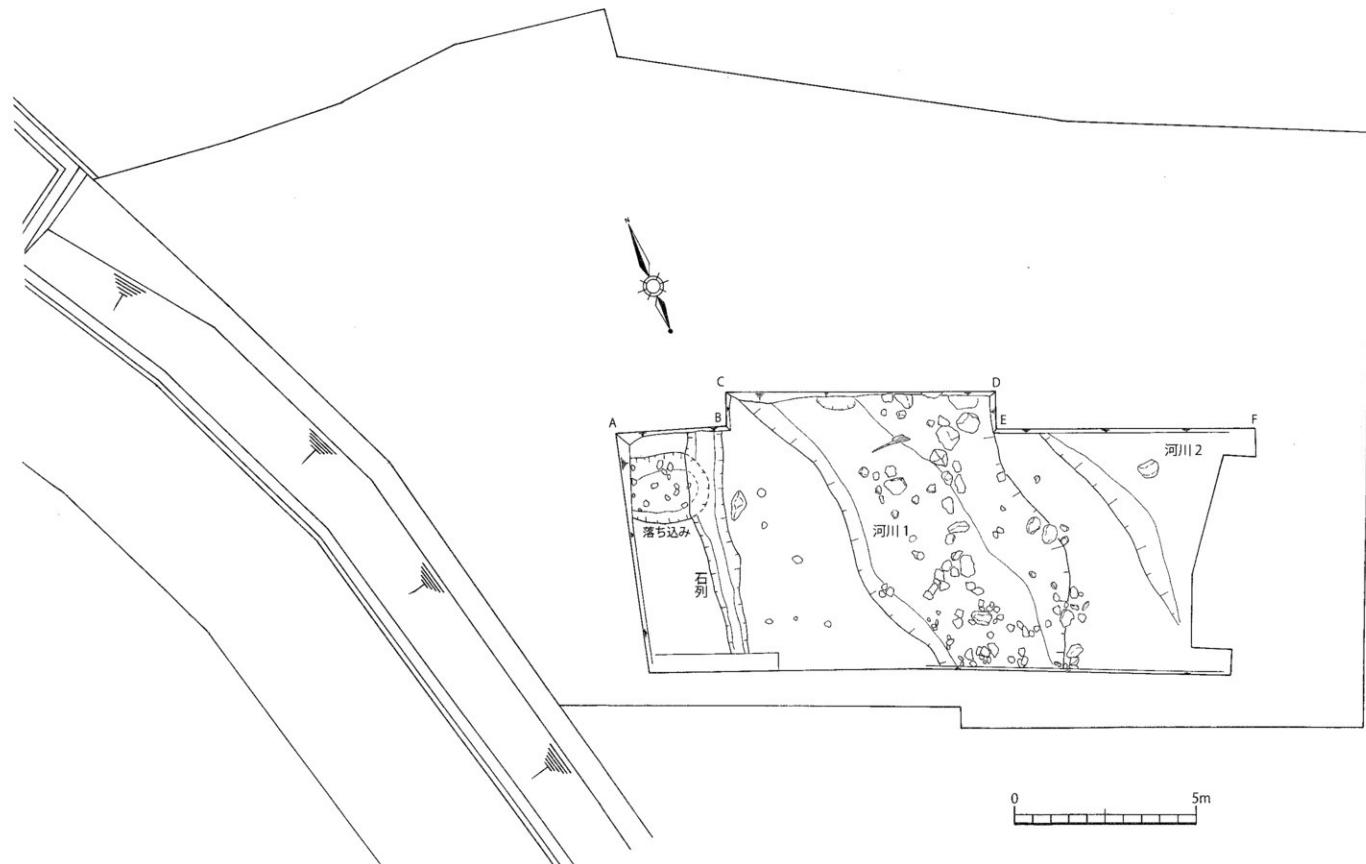
調査区の西端に南北方向に人頭大の花崗岩の石列を検出した。石列下には、溝を確認した。溝の規模は、南端で幅50cm・北側で90cmで長さは調査区の範囲の6.2mまで確認した。溝の検出高は、T・P + 33.093m、溝底の高さはT・P + 32.768mで深さは約33cmであった。溝底の南北の比高差北側が約29cm深く南側から北側に流れる溝を掘り、その上に花崗岩の石列を2段積み上げていた。

溝内から円筒埴輪・須恵器・土師器・土師質皿・瓦器等の破片が出土している。これらの土器編年からみて、中世の瓦器椀及び土師質皿の14世紀の石列遺構と考えられる。

◎ 落ち込み状遺構（第5図～第6図・図版11・図版13）

石列遺構と切り合って検出した。遺構の規模は、南北1.85m・東西2.2mまで確認した。落ち込み状遺構の南側の検出高は、T・P + 32.917mで深さは約57cmであった。

遺構の東側断面は第1層淡黄色砂層(2.5Y8/4)で厚さ約15cmである。第2層灰白色シルト層(10Y8/1)で厚さ約5～10cmである。第3層灰色粘土層(N6/)で厚さ約5cmである。第4層灰白色砂層(10Y8/1)で厚さ約5～15cmである。第5層灰色砂質土(7.5Y4/1)で厚さ約5cmである。第6層灰色砂質土(7.5Y6/1)で厚さ約20cmである。第7層 灰色粘土層(7.5Y5/1)で厚さ約10cmである。第8層灰色粘質土(7.5Y5/1)で厚さ約8～10cmである。第9層灰白色砂層(7.5Y8/1)で厚さ約10cmである。第10層灰色粘土層(5Y4/1)で厚さ約5cmである。第11層灰白色砂質土(5Y7/1)で厚さ約15cmである。第12層灰白色砂層(5Y8/2)で厚さ約3cmである。第13層淡黄色砂質土(5Y8/3)で厚さ約5～20cmで遺構の最下層になる。この第13層内にブロック状に第14層の淡黄色砂礫層(5Y8/4)と約20cm内外の花崗岩が13個の石が落ち込み状遺構の肩部及び底面に貼り付く状況で検出している。遺構内から時期を決定できる出土遺物は発見できなかった。しかし、石列遺構との切り合い関係から、落ち込み状遺構が先行することが明らかである。



第6図 正法寺跡（清滝古墳群）調査区遺構平面実測図

◎ 河川（第5図～第6図・図版11～図版13）

河川1と河川2は共に南北方向に平行して検出した。河川1は、調査区のほぼ中央部に検出したもので、河川1の規模は、南側で幅3.4m・北側で幅7m、長さは調査区の幅である8.1mまで確認した。河川1の南側肩部の検出高は、T・P + 33.353mで深さは約36cmであった。また北側肩部の検出高は、T・P + 33.076mで深さは約33cmであった。

河川底の比高差は北側が約26cm低いことから南から北に流れていたことが確認できた。河川1内の東側肩部及び河川底面に15～70cmの花崗岩が散乱している状況で見つかった。

北側断面の堆積土層は、基本層序で明記したように西側肩部に第8層の灰黄褐色砂質土(10YR4/2)が堆積している。東側肩部の堆積土層は第19層の暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2)が堆積している。この河川1の堆積土層は、基本的には3層に分かれている。第19層と第26層の暗灰黄色砂質土(10YR4/2)、第27層の灰白色砂質土(7.5Y7/1)疊混りである。

河川の断面から皿状で河川底の地山を確認した。

上記にも述べたように、第26層と第27層内には60～70cmの花崗岩が地山直上に流されてきた状況で検出している。

河川1内からの代表的な出土遺物は石鏃1点・サヌカイト片・縄文式土器片等が出土している。

石鏃は長さ2.35cm・幅1.5cm・厚さ2mmのサヌカイト製である。また、縄文式土器は粗製土器である。

河川2は河川1の東側、すなわち調査区の東端で検出した河川である。しかし、西側の肩部と北東隅の一部の肩部が確認している。河川2の規模は、北側で幅6m以上、長さは調査区の幅である6.4mまで確認した。河川2の西側肩部の検出高は、T・P + 33.12mで深さは約52cmであった。河川底の比高差は北側が約40cm低いことから南から北に流れていたことが確認できた。河川2内底面に55cmの花崗岩が置かれた状況で見つかった。

北側断面の堆積土層は、基本層序で明記したように西側肩部に第18層灰褐色砂質土(7.5YR4/2)が堆積している。東側肩部の堆積土層は第16層灰白色細砂(5Y7/1)が堆積している。この河川2の堆積土層は、基本的には8層に分かれている。第15層灰白色粗砂(5Y8/2)、第16層灰白色細砂(5Y7/1)、第17層灰オリーブ色砂質土(5Y6/2)、第18層灰褐色砂質土(7.5YR4/2)、第20層 灰白色粗砂(7.5Y8/2)、第21層黒色砂質土(7.5YR2/1)、第22層灰色砂質土(5Y5/1)疊混り、第23層灰白色粗砂(5Y8/2)、第24層花崗岩の疊層

で河川底の地山を確認した。

河川2内からの代表的な出土遺物は石鏃3点・サヌカイト片・縄文式土器片等が出土している。石鏃は長さ2.75cm・幅2.1cm・厚さ2mmと長さ3cm・幅1.75cm・厚さ2mm、現存長1.85cm・幅2.45cm・厚さ3mm、のサヌカイト製である。この石鏃は先部が欠損しているが、大型の石鏃である。また、縄文式土器も出土している。

第4章 まとめ

忍岡古墳

忍岡古墳は主軸が南北にある全長 87 m の前方後円墳で、昭和 47 年大阪府指定史跡となつた。

この古墳は生駒山系から最も西に突き出た丘陵の突端を利用して 4 世紀中頃に築造されている。古墳の立地条件としては絶好の場所で、墳頂部からは生駒山系の裾野および大阪平野や河内湖が一望に見渡すことができ、河内湖の水運を掌握した豪族の古墳ではないかと想定している。4 世紀における古墳は隣市の寝屋川市や大東市では発見されていないことからもそれを示唆している。

今回の建て直し工事によって石室が 67 年ぶりに清掃され、京都大学による発掘調査時に石が積みなおされているものの、その後の保存状態は良好であった。竪穴式石室内の長さ約 6.3 m・幅 1 m であった。木棺は残っていなかったが、中央が窪んでおりその痕跡は認められる。

奈良県立橿原考古学研究所の今津節生氏に碧玉製紡錘車などの副葬品と板石に塗られた赤色顔料の分析を依頼したところ、副葬品には水銀朱が、石室には第二酸化鉄が塗布され、使いわけられていたことが判明した。

石室に積まれた板状の石材は、奥田尚氏の鑑定によると猪名川産であった。石室の壁面には、板石が水平に積まれ控えにはこぶし大の礫が大量に使われているが、これは四條畷あたりでよく見られるもので、近くの讚良川などで調達したと考えられる。

平成 14 年 10 月 11 日に上棟式。12 月 22 日、日本建築の覆屋が完成し竣工式が行われた。旧覆屋の格子戸 2 枚と鬼瓦は四條畷市立歴史民俗資料館で保管している。

奈良井遺跡

古墳時代の四條畷市は、飯盛山系が南北に走り山麓の西方 2 km ほどで河内湖となる。生駒山系から、讃良川・岡部川・清滝川・権現川が河内湖に注いでいる。

四條畷市の古墳時代中期～後期の遺跡からは、普遍的に馬骨や製塙土器が出土し、馬を飼う牧場であったことを示している。いく筋もの川が自然の柵となり、川辺には馬的好む草が豊富に生え牧場に適した環境であったのだろう。

鎌田遺跡では「馬のまつり場」から楽器のスリザサラや祭具を載せる台が出土している。この遺跡は奈良井遺跡の西方向に位置し、奈良井遺跡の「馬のまつり場」に先行するものである。最近では大阪府教育委員会の調査による蔀屋北遺跡で、埋葬された馬一体分・準構造船をリサイクルした井戸枠・大量の製塩土器・木製鐙が出土し、注目されている。

清滝古墳群では馬の殉葬もみられ、四條畷小学校内遺跡・奈良井遺跡・中野遺跡などでは初期須恵器をはじめ韓式土器や韓式系土器が数多く出土し、渡来系馬飼集團の存在を示している。

今回の調査地は「馬のまつり場」の中心部であることと、後世による削平もあって遺物や遺構は認められなかった。マウンドをとりまく東側の溝は調査地のもう少し東にあると考えられる。

正法寺跡（清滝古墳群）

正法寺跡は数次にわたって発掘調査され、白鳳時代から室町時代に至るまで存在したことか判明している。寺域からは正方寺の墨書のある土師器皿が出土している。

大阪府教育委員会が平成5～7年にかけておこなった府道枚方・富田林・泉佐野線新設バイパス建設工事に伴う発掘調査で確認した遺構との関連を確認するために、四條畷市教育委員会が平成12年に発掘調査をしたところ基壇建物の続きが確認された。基壇建物の規模は大阪府の調査とあわせ東西26mまで確認できた。建物の礎石は浅い窪みをもつ一辺が1.2m前後のものが確認され、柱間は2.5～3.0mであった。それを復元すると南北4間×東西8間と想定される。この建物の時期は平安時代と考えられるものである。この寺は薬師寺式伽藍配置と考えられているが、それに従うと多少のずれはあるものの講堂の位置にあたると考えられる。また、乱石積みの瓦敷きの中には円筒埴輪が転用されており、かつては生駒山系の裾野に築かれた古墳群であった往時をしのぶことが出来る。

平成13年の発掘調査での大きな成果は鶴尾片が出土したことである。この鶴尾は回廊の南西部分にあたると推定されている場所の瓦溜まりから出土した。回廊は確認できなかつたのが残念である。しかし、この鶴尾はその形態や創建瓦と共に伴していることなどから創建当時に屋根を飾っていたと考えている。なお、鶴尾は四條畷市内および正法寺跡において初めての出土である。

測定時間 : 100sec
 X線管電圧 : 45kV
 X線管電流 : 0.30mA
 ターゲット : 最大
 フィルター : 無し
 コリメータ : 1.00mm
 X : 25.33mm
 Y : -83.18mm

最大 : 26.34cps 敷え落とし率 : 3.85%

No.	元素	ENERGY(keV)	積分強度 cps
1	T i -K α	4.450	6.69
2	F e -K α	5.338	184.45
3	F e -K β	7.020	28.57
4	K -K α	3.249	9.53
5	C a -K α	3.752	2.43
6	M n -K α	5.083	0.65
7	H g -L α	9.697	10.68
8	H g -L β 1,2	11.745	8.01
9	S -K α	2.280	1.40

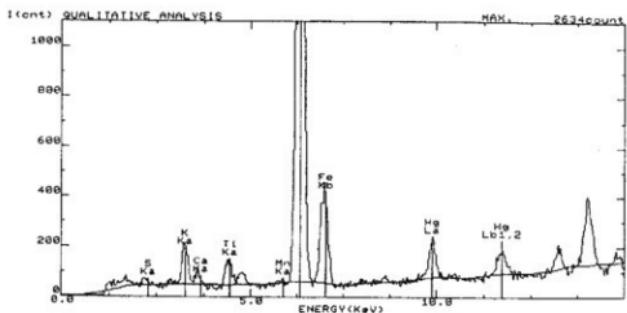


表1 紡錘車元素分析表

測定時間 : 100sec
 X線管電圧 : 45kV
 X線管電流 : 0.30mA
 ターゲット : 最大
 フィルター : 無し
 コリメータ : 1.00mm
 X : 45.11mm
 Y : -79.40mm

最大 : 18.88cps 敷え落とし率 : 4.76%

No.	元素	ENERGY(keV)	積分強度 cps
1	K -K α	3.273	6.92
2	C a -K α	3.545	5.54
3	T i -K α	4.450	6.47
4	F e -K α	5.369	118.26
5	F e -K β	7.020	18.88
6	H g -L α	9.930	83.45
7	A s -K α	10.457	18.06
8	H g -L β 1	11.788	79.20
9	S r -K α	14.049	158.67
10	S r -K β	15.752	49.73
11	C u -K α	7.965	0.70

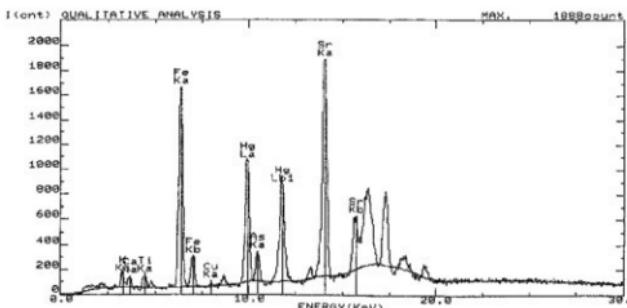


表2 鋼形態元素分析表

測定時間 : 100sec
 X 線管電圧 : 45kV
 X 線管電流 : 0.30mA
 ターゲット :
 最大 : 20.48cps 数え落とし率 : 3.85%

No.	元素	エネルギー(keV)	積分強度 cps
1	K - K α	3.273	9.10
2	Ti - K α	4.481	9.92
3	Fe - K α	6.369	145.62
4	Fe - K β	7.020	22.79
5	Hg - L α_1	9.930	39.31
6	Hg - L β_1	11.788	36.46
7	S - K α	2.317	0.65
8	As - K α	10.498	5.63

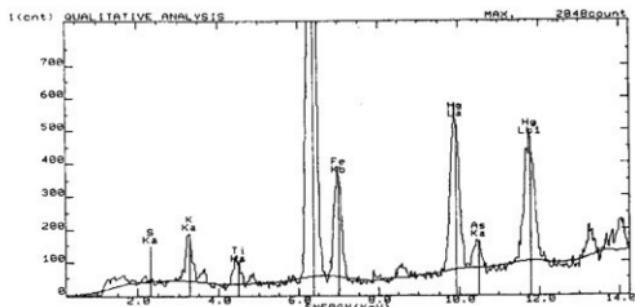


表3 石鉱元素分析表

測定時間 : 100sec
 フィルター : 無し
 X 線管電圧 : 45kV
 X 線管電流 : 0.30mA
 ターゲット :
 最大 : 105.31cps 数え落とし率 : 5.66%

No.	元素	エネルギー(keV)	積分強度 cps
1	Fe - K α	6.372	766.68

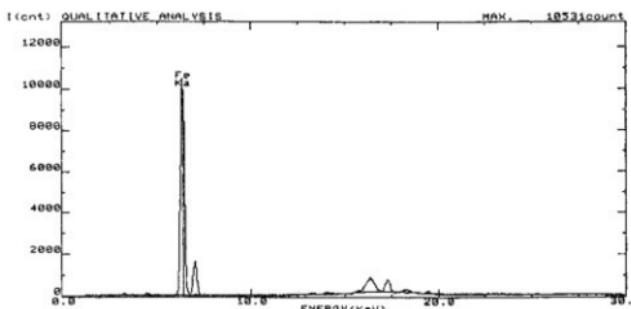


表4 縫穴式石室板材元素分析表

報告書抄録

フリガナ	シジョウナワテシナイセキハックツチョウサガイヨウホウコクショ
書名	四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書
シリーズ名	国庫補助金事業
著者名	野島 稔
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501 大阪府四條畷市中野本町1番1号 TEL. 072-877-2121
発行日	2003年(平成15年)3月31日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
忍岡古墳	四條畷市岡山	272299	北緯 34° 44' 16"	平成14年8月26日 ~12月20日	20m ²	身障者用道路
奈良井遺跡	中野		東経 135° 38' 58"	平成14年10月7日	26m ²	個人住宅
正法寺跡	清瀧			平成15年1月14日 ~1月20日	120m ²	道路建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
忍岡古墳	古墳	古墳時代	竪穴式石室		石室内の掃除及びトレンチ調査
奈良井遺跡	祭祀 遺構	古墳時代	溝		
正法寺跡 (清瀧古墳群)		縄文時代 中世	河川 落ち込み状 遺構	石鐵・縄文土器 瓦器椀・白磁皿	

忍岡古墳

- I 位置と環境
- II 古墳の墳丘
- III 内部施設
- IV 出土した副葬

1974年4月

四條畷市教育委員会

はじめに

みどりの森として市民に親しまれている忍岡丘陵に位置する忍岡古墳は、原形をとどめる古墳時代前期の古墳としては近畿地方でも有数のものとされている。

市の歴史を語る上で省くことのできないこの古墳にかかる報告書は、昭和10年京大梅原博士によるもののみであり、郷土愛好家の常に無念とするところであった。

昭和48年3月 日本考古学協会員、瀬川芳則氏の御好意により実施した古墳玄室の測量調査をきっかけに、測量実測図に加え、若干の写真、説明、さらに府教委発行の遺跡実測図を集録、文化財シリーズ第2集として、ここに刊行することとなった。文化財保護行政推進への一助となればこの上ない幸せである。

なお、本冊子を刊行するにあたり御協力いただいた瀬川芳則氏、枚方市文化財研究調査会、暇古文化研究保存会の皆さんには深甚なる感謝の意を表します。

昭和49年4月

四條畷市教育委員会

教育長 奥田久雄

I 位置と環境

忍岡古墳は、四條畷市の北部、国鉄忍ヶ丘駅から西方 300 m の丘陵上に位置している。

四条畷高校より以西の黒土の沖積地である河内平野に突出している標高 40 m の丘陵で、この忍岡丘陵は、行者山・交野が原・香里台地などと同じく赤上の地層の洪積期丘陵であり、花崗岩でできている飯盛山・東・田原につづく生駒山系によりそろのように立地している。

丘陵の北側には讚良川が流れ、広々とした河内平野をながめる景勝の地であるばかりでなく、南北朝時代の四條畷の合戦では、北軍高師直の軍勢の拠点になったり大阪夏の陣には、徳川秀忠が前進の陣地を定めるなど古くから軍事的にも重要な位置を占めていた。

忍岡古墳周辺の歴史的環境としては、讚良川からは、チョッピングトール・翼状ナイフ・細石器などの旧石器の出土がしらされている。

讚良川北岸の台地とそれにつづく河岸段丘には、縄文時代の岡山遺跡があり、縄文式土器の他に白鳳時代の古瓦が出土している。蓮華文のつく瓦の出土することからは、この地の豪族であった新羅系の茨田勝を創建者とするらしい讚良寺（更荒寺）の存在が考えられるであろう。

四條畷市には、忍岡古墳のほかに古墳時代の遺跡としては、中野に墓の堂古墳、清滝に双子塚古墳が現存するほか、滝にも黒石古墳があったといわれている。

今丘陵上には、忍陵神社が鎮座しているが、この神社の社殿が、昭和 9 年 9 月に室戸台風で倒壊し、翌年の復旧工事で、偶然、石室の一部が発見された。これが忍岡古墳の発見である。

この発見により大阪府史蹟調査委員会では、一応の調査を実施し、その結果は梅原末治博士によって「日本古文化研究報告第 4 ・ 近畿地方古墳墓の調査 2 ・ 第二河内四條畷村忍岡古墳」に報告されている。

なお、保存されている石室は、調査後に一部復原されたものである。

II 古墳の墳丘

北向きの前方後円墳であるが、前方部には大正寺が建ち、墓地になっているし、後円部は上部が削平され忍陵神社社殿があるために、現状の墳丘は原形とは異なっている。

梅原末治博士の前掲の報告書を参考にして、現状に若干の推測を加えながらこの古墳を考えてみよう。

古墳は南北に主軸をもち全長約 87 m の前方後円墳である。

後円部の直径は約 45 m で、現高は約 6 m であるが、社殿の築造のために削平されており、

原形の高さは約2mほど高かったと推定される。

後円部の南側から西側の一部の下辺がよく原形を残しており、それをもとに復原してみると截頭円錐状をなしていたと思われる。

後円部と前方部のくびれ部にあたる所に巾3m程の凹地があり、この凹地は後円部の東側前方から前方部にのびている。

前方部は、この凹地が西に曲って小径の所で段をなしている部分までとも推定されているが、後円部の大きさや高さ等から、大正寺の鐘隣北端までと推定される。

前方部の巾は約20mで、高さは後円部の高さの半分位であろう。

現状では葺石の石材も円筒埴輪等もみつけられないが、円筒埴輪が石室の崩壊した部分から出土したと報告され、京都大学にも少量の円筒埴輪片が保管されている。

III 内部施設

石室は後円部のほぼ中央に位置しており、軸は古墳の主軸と平行で南北の方向にとっている。

復原された石室の大きさは、長さ6.3m、巾は南端では1mであるが、序々に狭くなつて北端では0.6mになる。高さは南端では0.73mであり、少し高くなつて序々に低くなつていき、北端では0.45mになる。

石室の構造は、安山岩質の板材を小口積みしつけて、上部を同質の板材を並架しているのは、多くの竪穴式石室に見られる構造である。

石室の底部は、粘土をかためて、0.3mの厚さにしきつめた粘土床をつくっている。粘土床は、石室の平面よりもひろくつくられている。中央部上面は、ちょうど蒲鉾を逆にしたような形で南北に凹んでいる。

この凹みには、考古学上、割竹形木棺と分類されるところの、直径1mもあるコウヤマキの大木を二つに割り、内を削り抜いてつくられた木棺が安置されていたものである。

底部の一部に、粘土床をつらぬいて大きな穴があるが、これが発見時に掘られたものである。この穴の観察から床は、封土と思われる土壤に粘土をひいた構造であることが明らかにされた。

石室の外周囲には、大小の河原石が置かれて地固めをしている。石室が崩れないようになされている。

石室の壁面の構成は、現在では復原され、断面を見ることができないが、前掲の報告書には、河原石は南側では0.6m以上、北側では0.9m以上置かれ、その下に粘土床よりも0.25m程深く基底に大きな割石を並べられていたと報告され、さらに次のように報告されている。

「即ち小口積の壁面の外側に同様の石材を加えて固めとしていることは従来とても既に知られている所であるが、こここの基底部では内壁から五尺余りの部分にまで及びそれから上に至るに従い漸次減じて以て天井部に達し、而も縁辺に大石を重ねるところ、これに天井石を覆うて見ると、室を中心として大きな石築の「マックス」をなしたことが知られ、恰も細長い一種の積石塚とも見る可き外容となる。」

天井石は今回の調査の時には、5枚しか遺存していないが、発見時には6枚遺存していたということである。しかし石室を覆うにはたりず、盗掘の際に取り去られたものである。

石室内部の側壁の石に朱の付着が認められ、粘土床の凹みには、朱の薄層があったと報告されていることから、遺体保存に朱を使用されたものであろうが、現在では認めることができない。

IV 出土した副葬品

石室内部には、既に述べたように盗掘されていたために、副葬品もあまり残存していなかつたが、南半分より石製品や鉄製品が出土している。

発見者の語った副葬品の位置は、南壁の近くの床の縁に刀剣の破片、凹みの東南端に斧頭、西端に鉾の破片、室の中央から南にかけて鉄片が偏在し、東南の壁の近くから紡錘車等の石製品があったとの事である。

石製品としては、石鉿・紡錘車・鍬形石が認められる。

石鉿	破片	1個分
紡錘車	破片共	6個分
鍬形石	破片	1括

石鉿の材質は碧玉製と呼ばれているもので、全形の約3分の2が遺存していた。内径5.7cmであるが、表面はひどく風化している。

紡錘車は、完形品4個、破片2個で、いずれも碧玉製である。完形品について見ると、径は5cm、高さ1cm内外で中央の孔は一方から穿ったものである。

鍬形石はすべて碧玉製である。破片は小さく復原は不可能であるが、2・3個分であると推定される。どれも直弧文系で飾っている。

鉄製品としては、剣身・太刀拵・鉾・斧頭・鎌・刀子・鎌・小札が認められる。

剣身	残欠	2口分
太刀拵	残欠	1括
鉾	残欠	2口分
斧頭	2種	3個

鎌	残欠	2口
	残欠	1個
刀子		1口
鎌	破片	若干
小札		数口

剣身は2口共に木鞘が身に密着して遺っており、太刀の柄の片に葛籠の原形をとどめた柄の一部の外に、直弧文を刻出した装具片があって、しかもそれが木彫と見しく精巧な彫法を示している。

斧頭には、扁平な古式の小型品と、両側を折り曲げて袋状にした大型品がある。

鎌には木柄が遺存していた。

小札はこはぜ形をしており、挂甲所用のものであることから甲の副葬が推察される。

用語説明

古墳時代とは

弥生時代に継続する時で、弥生時代に始まった農耕が、共同体生産に発展していき、耕地の拡張などによって生産量をましていった。

この生産量の増加に平行して、段階分化がはっきりしていき、統治形態が出現してきて、国家的統一が進行していった時代である。

時期はだいたい3世紀末から6世紀中頃までである。

前方後円墳

古墳は土を高くもって造られた古代の墓であるが、盛土の外形からいえば、方形・円形・前方後円墳の三大別される。

前方後円墳は、方丘を前方部、円丘を後円部、方丘と円丘との接するところを「くびれ部」という。日本の古墳時代に特有の墳墓形式で、その形から茶臼山・車塚・双子塚と呼んでいるところもある。

円筒埴輪

埴輪は、古墳の墳丘にたてられる赤褐色の素焼の土製品の総称である。

考古学上では、埴輪は円筒埴輪と形象埴輪とに2つに大別される。円筒埴輪には、簡単な円筒形のものと、円筒形の上部が広がっている朝顔形円筒埴輪がある。形象埴輪は、動物

や人物、家などをかたどったものである。

豎穴式石室と横穴式石室

古墳の埋葬設備で石材を積んで作った室を石室といい、これには豎穴式石室と横穴式石室とがある。

豎穴式石室は、はじめに四方の壁を造り、遺骸収容後に上部を閉塞する構造である。

横穴式石室は、はじめに三方の壁と天井部を造り、最後に一方の壁を出入口として閉塞する構造で、ふつう羨道と玄室に分かれている。

〈紡錘車〉

糸をつむぐとき、回転によって糸に縫をかけるため、糸巻棒にさしてその回転をたすける円盤形あるいは截頭円錐形、算盤玉形の小器具、土製、石製、骨角製などがあり、大きさは径3～5cmで中心に貫通孔がある。

〈鉤〉

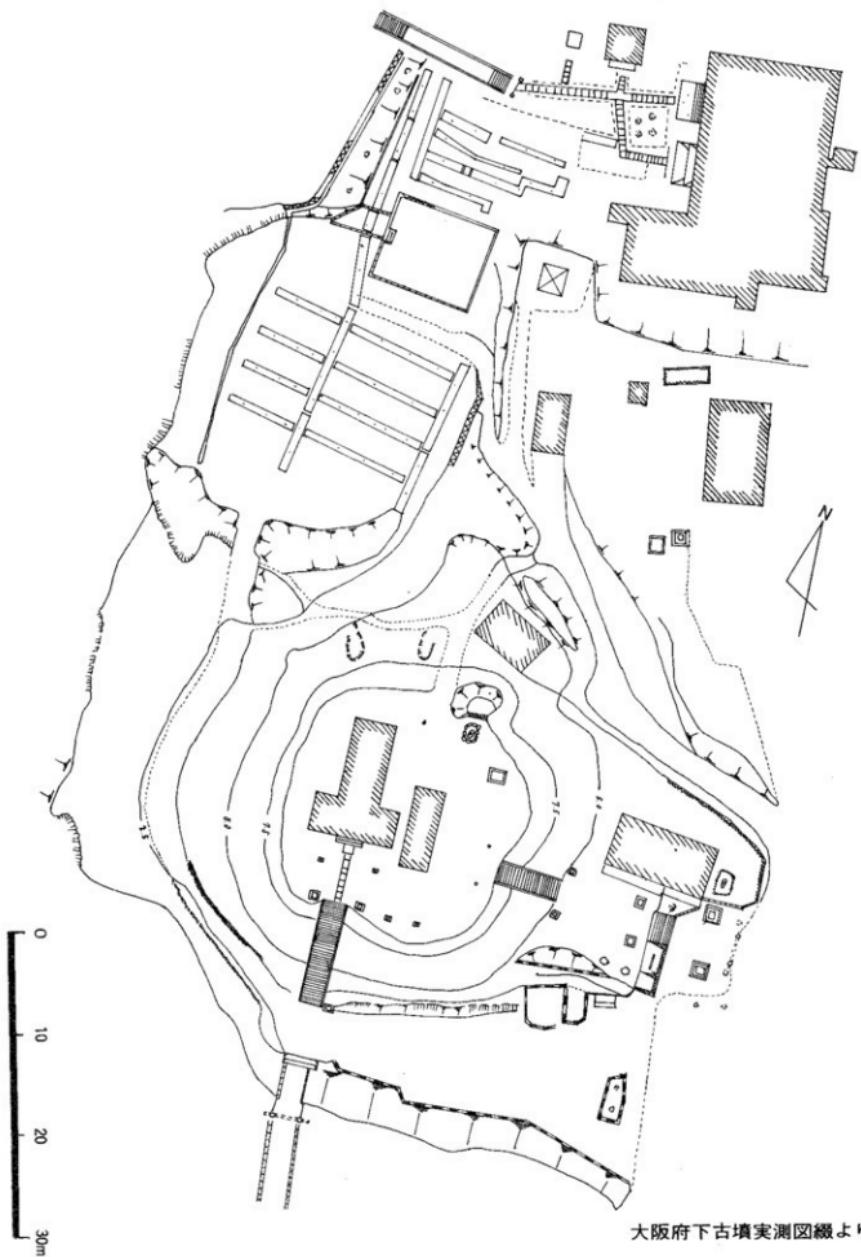
腕輪をさす日本の古語。腕輪であればなんでも鉤といえるわけであるが、考古学上の用語としては、主として古墳時代の遺物について石鉤、銅鉤、銀鉤、金鉤、鈴鉤などとよんでいる。

〈鍬形石〉

古墳時代の碧玉製の腕輪の一種。

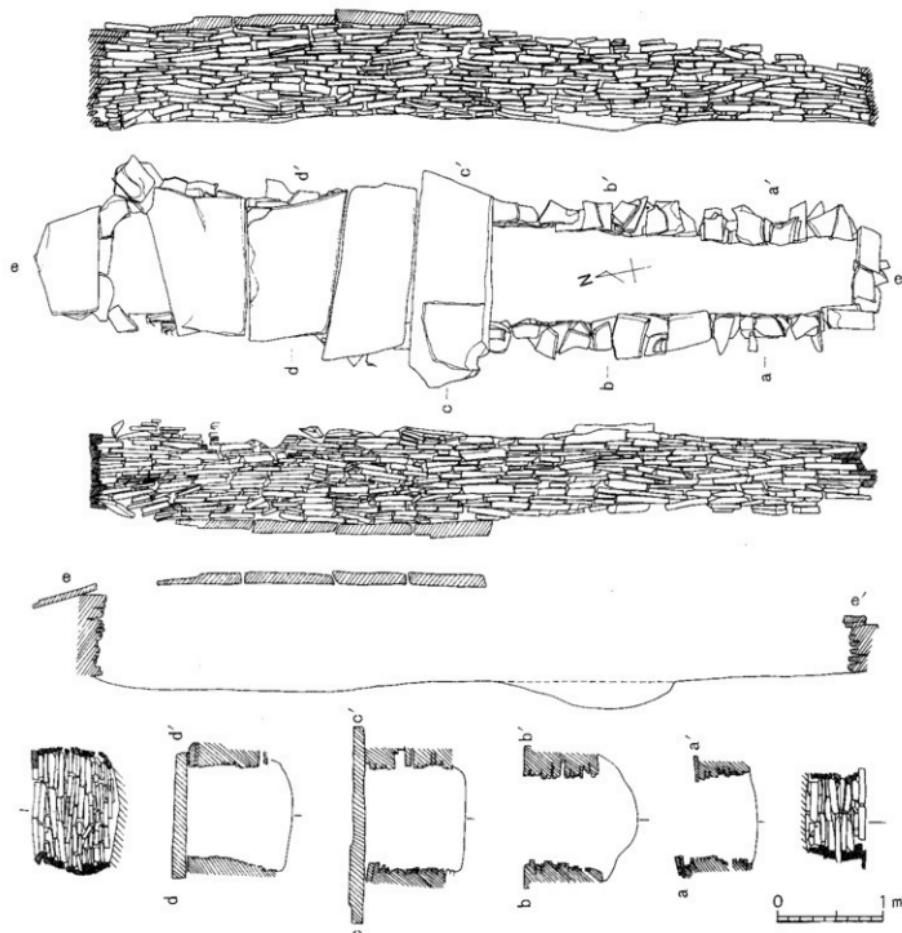
形が鍬の歯に似ているところから、江戸時代の学者によって鍬形石とか、狐の鍬石とか呼ばれ、今日もそのまま鍬形石の名で呼ばれている。

忍岡古墳実測図

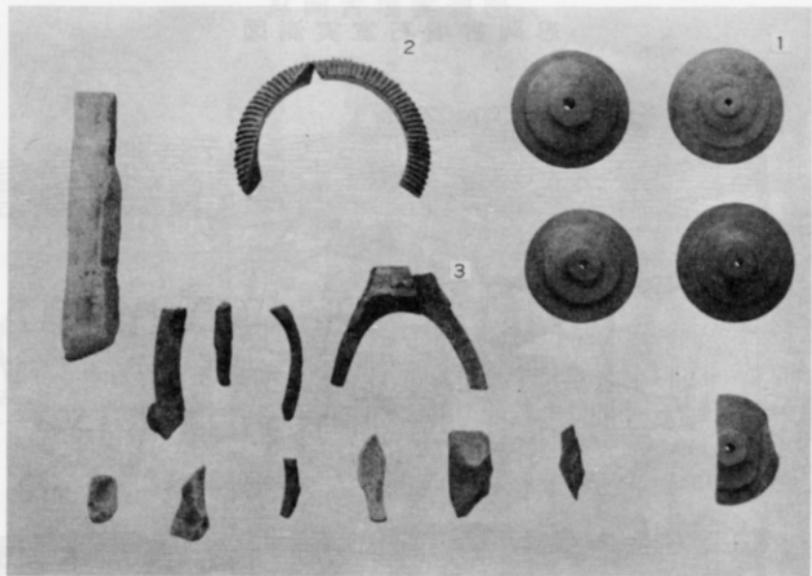


大阪府下古墳実測図綴より

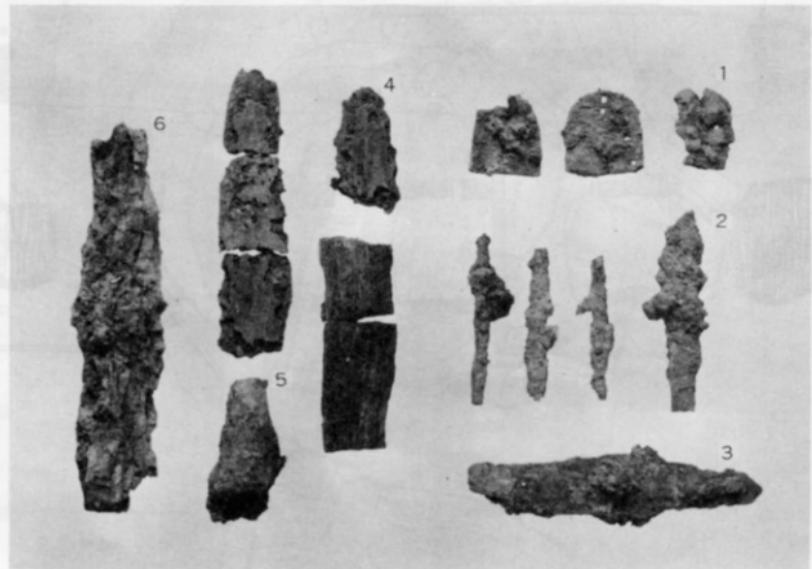
忍岡古墳石室実測図



忍岡古墳出土の遺物



忍岡古墳出土の遺物(二)
1 小札 2 鉄鎌



1
鎌

2
鉄斧

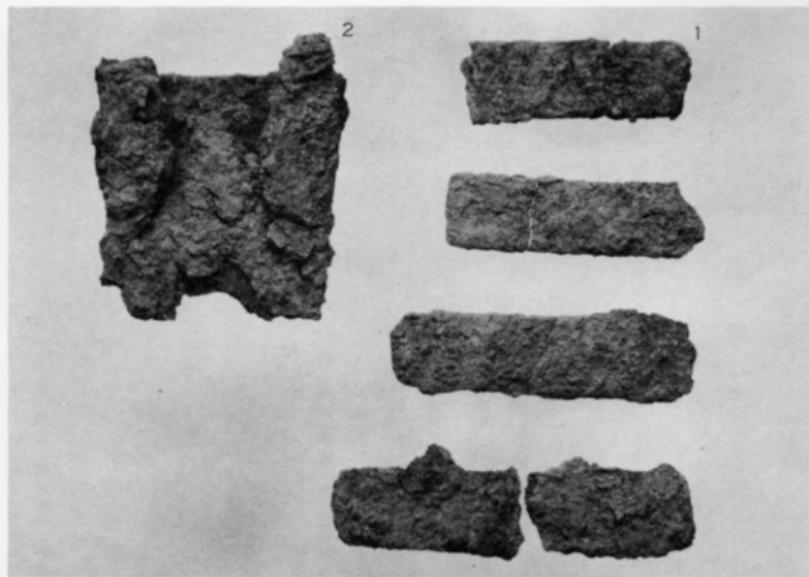


図 版

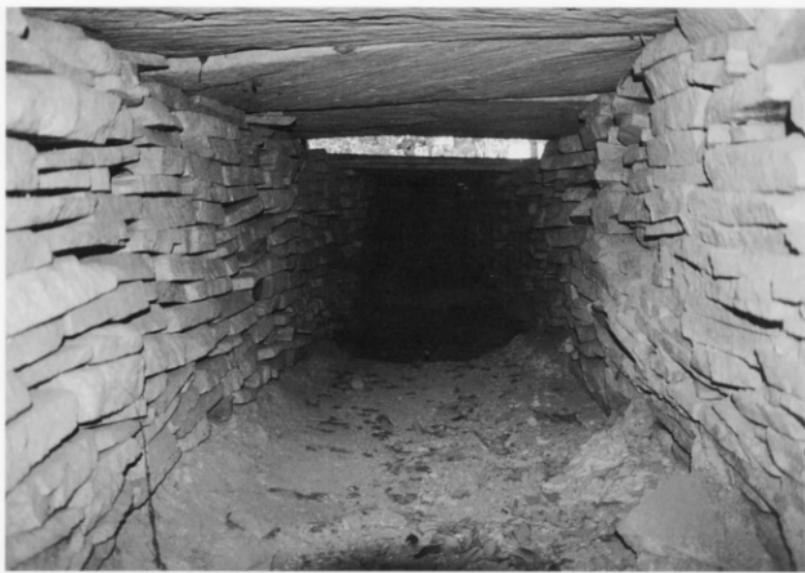
図版 1 忍岡古墳覆屋解体前・覆屋解体後全景



図版 2 忍岡古墳石室全景・研究者に公開



図版3 忍岡古墳精査・石室内部全景



図版4 忍岡古墳石室全景・石室板石と封土粘土



図版 5 忍岡古墳石室南側板石と河原石検出状況



図版 6 忍岡古墳石室覆屋完成・石室内掃除状況



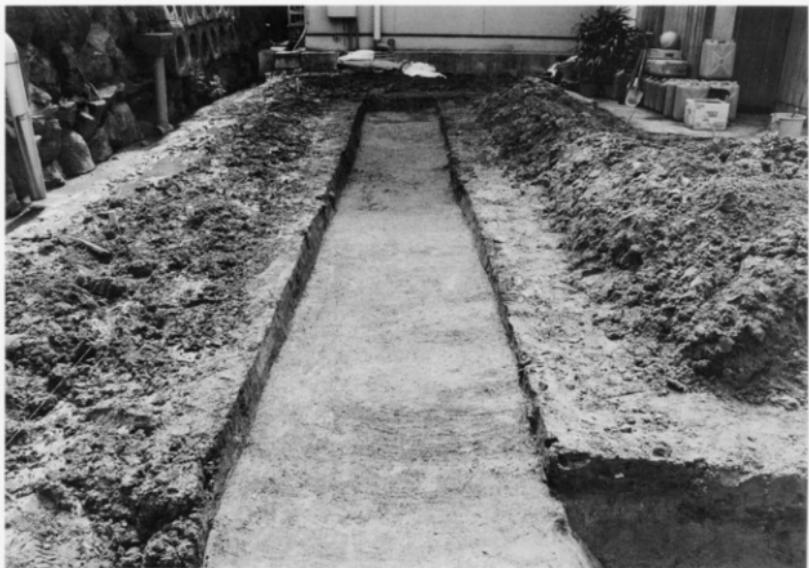
図版7 忍岡古墳トレンチ設定状況



図版8 奈良井遺跡調査前全景



図版9 奈良井遺跡トレンチ設定状況・調査スナップ



図版 10 正法寺跡（清瀧古墳群）調査前全景・機械掘削状況



図版 11 正法寺跡（清滝古墳群）遺構検出状況



図版 12 正法寺跡（清瀧古墳群）河川1・河川2遺構完掘状況



図版 13 正法寺跡（清滝古墳群）落ち込み 1・溝状遺構完掘状況



図版 14 正法寺跡（清瀧古墳群）河川1・河川2内出土遺物



（河川1）



（河川2）

四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書

平成15年3月発行

編集 四條畷市教育委員会

発行 四條畷市教育委員会
四條畷市中野本町1-1

印刷 株式会社 共英印刷所